

全教東日本大震災ボランティア活動報告

ばということ、

集まった250
人全員での手作

業になりました。

目黒 衆
作業は、土嚢

8月3日から5日まで、
夏の全教第2次ボランティア活動がありました。豊中からも、

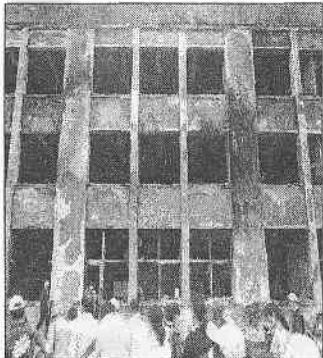
目黒さん（北緑丘小）・中
道さん（北丘小）・綱島さん（高川小）・朝輝さん（熊野田小）・西山さん（同）が参加しました。その報告です。

（一日目）

仙台から石巻へ

仙台市のホテルから2時間かけて石巻市へ行きました。震災被害を受けた街周辺に宿泊できる施設はなく、比較的被害の少なかった都市部からの移動になりました。

石巻駅周辺の被害は、目立ったところがありませんでしたが、バスで10分ほど移動すると突然建物



3日間燃え続けた門脇小

黒く焼け焦げた小学校
集合場所は、門脇小学校の運動場でしたが、校舎は黒く焦げてまるで爆撃に

ど移動すると突然建物が多くなり視界が広がりました。見えるのは、そこに家があったと思われる更地になった土地と、一階部分がむきだしになった建物、そしてがれきの山と重機だけでした。門脇町に着いて、その被害の大きさを目の当たりにして言葉が出ませんでした。

北緑丘小学校

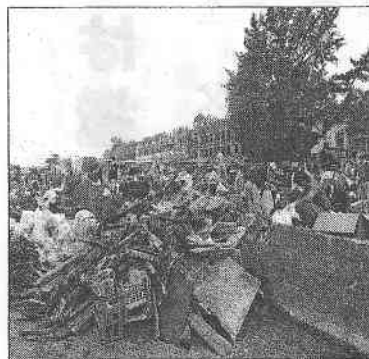
もあつたかのような無惨な姿になっていました。津波が押し寄せた車が発火して、火災が起こつたそうです。学校とわかるものが残っているのはわずかで、焼けた机と椅子などが散乱した状態でした。

校舎脇に花が置かれ、「○○ちゃん、助けられなくてごめんね。」という手紙が添えられているのを見て、涙が出ました。

墓地の

がれき処理

一日目の作業は、その門脇小学校の隣にある西光寺のお墓のがれき処理でした。倒れた墓石のまわりには、手付かずのがれきが散乱した状態でしたが、お盆を前に少しでもきれいにでき



墓地から出たがれきの山

袋に分別かまわず、とにかくがれきを入れるというものでした。がれきといつても様々で、大小ある木々や瓦、近くにある製紙工場から流れ出た大量のプルプ、そして家から流れ出た生活用品など多種多様でした。

時間が過ぎてても、がれきはなかなか減らず、まるで下から湧き出てくるようでした。レコード、衣服、作文帳、子どものおもちゃ、靴、コップ・・・持ち主を

失った「物」には、それぞれの想いがこめられているようで、土嚢袋に入れるべきかどうか迷うこともありました。（持ち主が特定できそうな写真や卒業証書の入った筒などは、別に保管）

作業の途中で、行方不明だった方が発見されました。翌日、身元もわかったそうで、よかつたと思うと同時に、まだ4千人以上の方が見つからないことになりまし

人災をつくる政治 最後に、宮城高教組委員



高橋正行さんの話を聞く

長の高橋正行さんのお話を聞きました。

津波は天災であるが、復興がなかなか進まないのは人災であるという話が印象に残っています。

今回の震災以後、地元にくわしい職員が少なく、被災者の把握と事務的な処理がなかなか進んでいないそうです。すべては、構造改革以後、市町村合併が進み、市職員の削減などに起因している。

ほかにも、市民の声に耳を傾けずに復興計画を押し進めようとしているいい加減な政治の現状がよくわかり、腹立たしさを通り越して情けなくなりました。

それでも、復興に向けて地元の人たちが団結して活動している様子がよくわかり、逆に励まされる思いで話を聞くことができました。



防塵スタイルで作業

〈二日目〉 東松島市の農家で

稲の苗箱洗い

塩を含む泥をかぶった9700箱の苗箱を洗浄する作業です。以前のボランティア団体が6300箱を洗浄したそうなので、それも合わせてと16000箱も泥をかぶってしまったことになりそうです。泥だけならまだ使えるのですが、塩を含んでいるため、一つひとつを洗わなければ使えません。一度は全部捨ててしまおうと考えたそうですが、一箱500円、計800万円の損失になるということで、ボランティア団体に手伝ってもらったことにしたそうです。



苗箱を水槽で洗う

全員無事だった

浜市小学校

作業終了後、宮城県教組石巻支部長の渡辺孝之さん

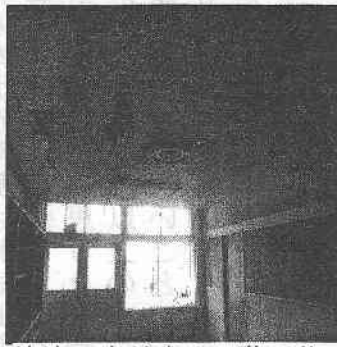
す。農家全体の損失は一億円以上あるそうで、少しでも損失が減れば・・・という思いになりました。

泥をたたき落として、水槽で一つひとつの苗箱をブラシでこすり汚れを落とす作業を約80人で分担して、黙々と続けました。一日で9000近い箱をきれいにすることができました。残り

りは、翌日、この日の半分の人数で作業をするようになりました。

に農家近くの浜市小学校に案内していただきました。

運動場では、がれきの山の中を重機が動いていました。校舎は、耐震化を終えていたので、外見上は大きな損傷は見られなかったのですが、校舎の中には、津波が押し寄せた痕が残っていました。



津波の痕が残る1階天井

津波は、階段をあと5段上がれば二階に届くというところまでできたそうで、水の線が壁に残り、当時の状況を思い起こさせました。

浜市小は、いち早く車のテレビで津波の警報を確認し、児童や住民を階上へ避

難させたため、児童と教職員は全員無事でした。

三階の音楽室には、30人近くの子どもと住民が不安な一夜を過ごしたようですが、理科室にあった豆電球を明りにしたり、学校にあるもので暖をとるなど、教職員の機転のきいた動きに感心しました。

最後に、体育館を見ましたが、床にひびが入り、大きく盛り上がっていました。もし対応をまちがえていたらと思うとゾッとする光景でした。天災を最小限にとどめ、人災にしないために学校は何をすべきか、あらためて考えさせられました。



床が大きく盛り上がった体育館

〈三日目〉

引き続き苗箱洗いを

前日と同様、東松島の農家で苗箱洗いの続きをしました。1時間ほどで作業は終了し、すべての苗箱をきれいにすることができました。

農家の方が、笑顔で感謝の気持ちを伝えてくださって、来てよかったなと心から思いました。

何人かの人は、作業を早めに終えて、持参していた紙芝居を、避難所の子どもたちに読み聞かせに行っていました。

救援物資は、余るほど足りているようで、これから、被災された方のお話を聞いたり、歌や紙芝居などで楽しい取り組みをしたり、心のケアにつながる活動が求められるようです。

来て見て伝えてほしい「被災地のために自分に

できることがしたい。」という思いから参加したので、現地に向かう前は、不安でいっぱいでした。しかし、参加してわかったことは、ボランティアは決して難しいものではないということでした。

作業は、確かに大変でしたが、みんなと協力してやっていくことで、少しずつ成果が見えてくるのは楽しかったし、達成感がありました。そして、被災地の状況を実際に見たり、体験談を聞くことでいろいろなことを知ることができました。

現地のどの方も「とにかく、物見遊山でもいいからこの状況を見に来てほしい。そして、見たことを伝えてほしい。」と言っておられました。

東北は、まだまだボランティアを必要としています。機会があれば、また行きたいです。